

# たのしい たのしい 船穂校♪

倉敷市立船穂小学校

## 綿花で紡ぐ倉敷物語その①

5月に栽培委員会の子どもたちと綿の種をポットに播いた。そして、作付する予定だったキャベツ畑、3年生のモンシロチョウの学習が終わったので、今日、耕運して栽培委員会の子どもたちと綿の苗を植えた。

倉敷市が繊維のまちとして日本遺産の認定を受けたので、市内各小学校で綿を栽培して、できた綿花を集めてジーンズを作るということで綿の種が市教委から送られてきた。「へえ、そうなんだ。」程度の関心で種を播いた。

ところが、校長会研修会で井上教育長の講話を聞いて、このストーリーを作り上げた人たちの知識と発想の豊かさに驚かされた。誰がどんなきっかけで、倉敷市の歴史と産業を『一輪の綿花』の物語にまとめたのか。倉敷市の歴史と産業にかなり精通している人でなくては無理だろうし、柔軟な捉えができる人でなくてはこの物語は構成できないだろうと思った。

倉敷市は、江戸時代に天領だった倉敷地区と、備中松山藩領の玉島地区と、備前池田藩領の児島地区と、旗本早島戸川家・帯江戸川家領の帯江・豊洲・茶屋町地区と、備前岡田藩領の真備地区などで構成されている。新市合併50周年式典が春に行われたが、倉敷地区・玉島地区・児島地区は独自の歴史と文化を持ち、一つの共通項でくくって語られることは、今まであまりなかった。

だれがどんなきっかけで考え出したのかという疑問がふくらんできて、市教委に問い合わせた。電話に出た女性は、「それはですねえ。日本遺産の認定申請のために、文化財保護課が中心となって考えたようですよ。この事業を行うために日本遺産推進室も開設される予定です。まだ担当の人は文化財保護課にいますから、詳しくはそちらに電話をしてください。」と明るい声で答えてくれた。

すぐに文化財保護課に電話し、「倉敷市の歴史と産業を綿花でくくれば一つの物語になるという発想はだれがどんなきっかけで考えついたのですか。」と疑問を投げかけてみた。突然の電話にも関わらず担当の女性は丁寧に応じてくれた。そして、「平成27年に倉敷市の繊維産業を日本遺産に認定してほしいと文化庁に申請しました。美観地区や、干拓や、児島の繊維産業などの資料をたくさん持参しましたが、文化庁は取り合ってくれませんでした。『歴史と現在の産業や人々のくらしが繋がっていかなくてはならない。それが一つのストーリーになっていなければ日本遺産に認定することは無理です。』と言われました。それから、幾度も課内会議をもってこのストーリーを考え出しました。」と説明してくれた。

『小学校で綿を植えてジーンズを作ってどうするのだろう。まあ、植えればいいんでしょう。』などと思っていたけれども、郷土倉敷を愛する子どもを育てたいという井上教育長の話を聞き、懸命に『一輪の綿花から始まる倉敷物語』を考え出した文化財保護課の思いがわかったことで、自分も協力したい、たくさんの綿が収穫できるように栽培委員会の子どもたちとがんばりたいと思うようになった。

昨日、配ったリーフレットも読んでみてね。

